大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立民族学博物館

みんぱく公開講演会

世界の伝統芸能・最前線

―映像は文化遺産を伝えられるのか

毎日新聞夕刊連載コラム「異文化を学ぶ」をもっと学ぼう！

2006.3.3（金）オーバルホール 毎日新聞ビルB1

主催 国立民族学博物館・毎日新聞社

プログラム

17:30〜18:30	受　付
18:30〜18:35	開　会 毎日新聞社編集局長：伊藤　芳明
18:35〜18:40	挨　拶 国立民族学博物館長：松園　万亀雄
18:40〜19:20	講　演① 「カンボジア大型影絵芝居の伝承」 文化資源研究センター・助教授：福岡　正太
19:20〜19:30	休　憩
19:30〜20:10	講　演② 「南インドの結婚式と音楽」 民族文化研究部・助教授：寺田　吉孝
20:10〜20:30	講演者と話そう 司会 文化資源研究センター・助教授：野林　厚志 講演者 福岡　正太 寺田　吉孝

目　次

松園万亀雄「国立民族学博物館および公開講演会について」… 1

福岡　正太「カンボジア大型影絵芝居の伝承」…… 3

寺田　吉孝「南インドの結婚式と音楽」…… 7

ごあいさつ

― 国立民族学博物館および公開講演会について ―

松園　万亀雄

国立民族学博物館（以下、「民博」と略称）は、東京と大阪で年に一度、公開講演会を開催しております。大阪では、昨年から毎日新聞社のご協力をいただいて開催しております。毎日新聞社には、この機会を借りまして厚く御礼申しあげます。

大阪での公開講演会は、吹田市にある民博の研究者たちの研究の中身を地元関西のみなさんに広く知っていただき、文化人類学・民族学は面白い学問だということを知っていただくために開催するものです。

まだ民博のことを詳しく知らない方は、民博は世界中のさまざまの民族の日常生活を反映した展示をしている博物館だと考えておられると思います。民博に博物館があることは間違いないのですが、民博の第１の役割は、世界の諸民族の社会に出向いて現地調査をおこない、住民と一緒に暮らすなかで人々の生活を記録し、物質文化を収集したり、文献を読んだり、映像記録や音響資料を集めたりして社会と文化を研究することです。そのことを、みなさんにはぜひ知っていただきたい。ひとくちでいえば、民博は博物館をもっている民族学・文化人類学の研究所だということです。

民博には現在、70名近くの専任の研究者がいます。大学と同じように、教授、助教授、助手とよばれています。民博本館の建物は４階ができていますが、常設館は２階部分にあり、３階には図書室や、映像・音響資料を処理する情報関連の部屋などがあります。４階には、研究室と、大勢あつまって共同討議するときに使う会議室があります。博物館の来館者は、たいてい本館２階の常設館やすぐ近くにある特別展の展示場をご覧になってお帰りになるわけですが、本館のその上の階には民族学・文化人類学の本をたくさん集めた図書室や研究者の研究室があるということです。

民博がほかの国立大学とちがうのは、民博が大学共同利用機関とよばれる研究施設として設置された点です。民博の研究者だけではなく広く国内・海外の研究者に民博内の豊富な研究資源を使ってもらい、民博との共同研究によって民族学・文化人類学の研究成果をあげるために設立されたわけです。ですから民博には常時、外部から大勢の研究者がやってきては研究会をやったり国際シンポジウムを開いたりしております。

民博には、研究のほかに、もうひとつ大きな役割があります。民博の展示のためのさまざまな大量の資料は、学問的な関心のもとに国民の税金を使って収集してきたものですし、また民博の研究者の研究費も給与も税金でまかなわれておりますので、博物館展示を含めてすべての研究の成果は、市民のみなさんの知的好奇心を

満たすために公開し、役立てていただくという役割です。

民博では、これまでも常設展示のほか特別展示と企画展示、それらに関連する催し物や館内のビデオテーク、「みんぱくゼミナール」「みんぱく映画会」などをとおして研究成果の社会還元に努力してまいりました。今回のこうした講演会も、社会還元のための活動です。

民博のホームページをご覧になればわかりますが、民博所蔵の標本資料はほぼ全点が今では写真つきで公開されていますし、図書室も一般のみなさんに公開されております。図書室にどんな本があるのか、それもホームページで検索することができます。民博でおこなわれている展示や研究会なども、すべてホームページでご覧になれます。世界の民族に関するメールでの問い合わせも、民博の広報室で受け付けておりますし、担当の係や研究者が回答をしております。これからも、民博の資料をどしどし利用していただきたいと思います。

世界の伝統芸能・最前線

さて、本日は、カンボジアの影絵芝居について福岡正太助教授、南インドの結婚式と音楽について寺田吉孝助教授が講演いたします。福岡さんは東京芸術大学、寺田さんはワシントン大学の、いずれも音楽部の学部と大学院を修了しました。民博着任後も調査地で資料を収集しながら、立派な研究業績をあげ、国際的にも活躍している、日本でも有数の民族音楽の研究者です。

民族の伝統芸能は貴重な無形文化遺産です。しかし、それぞれの民族社会の政治状況、異文化との接触の状況、近代化の進みぐあいにより、伝統芸能もまた多様な変化をまぬがれることはできません。伝統芸能を保存し、次の世代に継承させていくには、さまざまな障害が予想されますが、それらを克服するにはどうしたらよいのか。そのために映像記録がどのように活用できるのか、といった問題。

さらには日常生活の近代化、世俗化にともなって、伝統的な儀礼が簡略になり省略されると同時に、現代のような異文化混淆の時代においては外来の要素がどんどん入りこみ、儀礼そのものだけでなく儀礼に付随する芸能も変容しています。そうした変化の道筋のなかでも、何がいちばん変わりやすくて、どの部分に伝統の原型らしきものがいちばん堅固に保持されているのか、という問題。

生活の実態が変われば芸能も変わる、というのは当然だとしても、この二つのものの変化の関係は、単純でストレートな関数関係にあるわけではありません。時間のなかでのそれぞれの芸能の意味の変化、部品の取り替え、衰退と消滅、さらには再生と新たな定義づけなどは、予想しがたいさまざまな要因によって起こっているのでしょう。それらの要因としては、歴史上のできごとや全体的な社会変化、合理的とばかりはいえない人間感情と民族アイデンティティ、あるいは新しい時代の文化運動や文化政策などが考えられるのかもしれません。

芸能についての、こうした問題を解きほぐすうえで、福岡さん、寺田さんの講演は、きっと貴重なヒントをあたえてくれるにちがいないと期待しております。

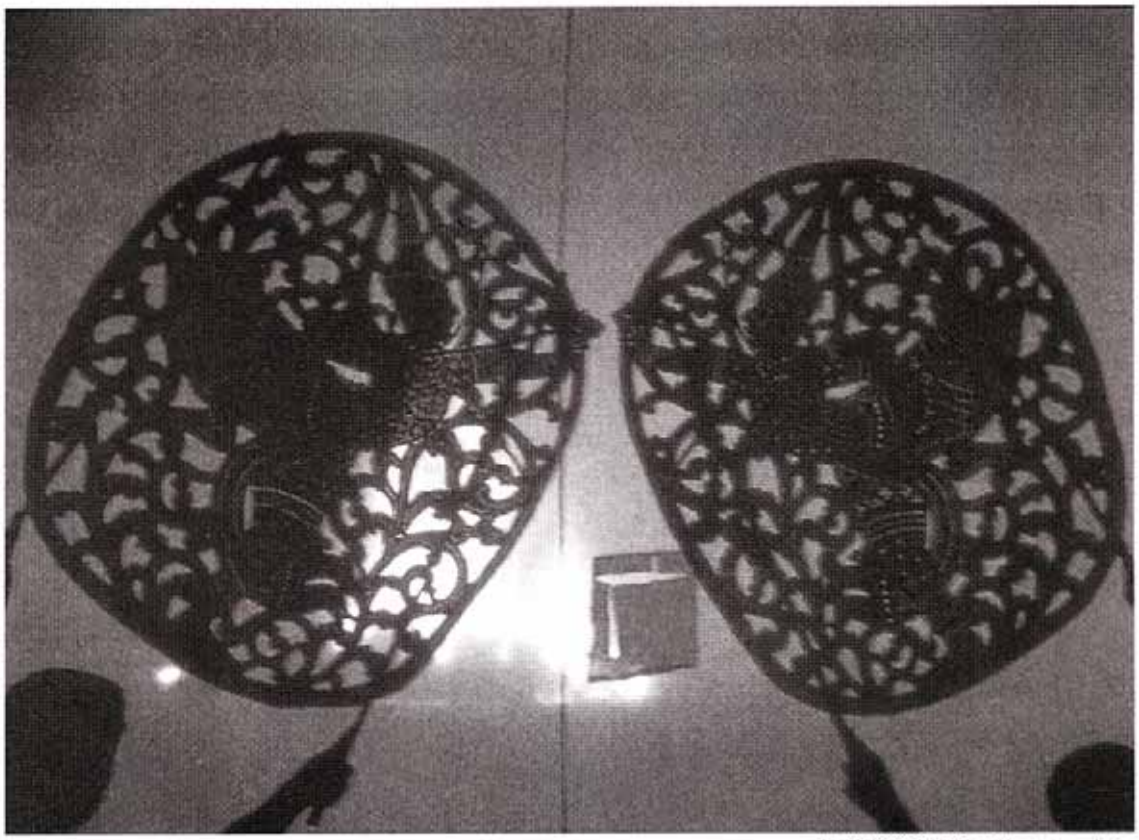
カンボジア大型影絵芝居の伝承

福岡　正太

大型影絵芝居スバエク・トム

スバエク・トムは、カンボジアのシエムリアップに伝えられる、大型の牛皮製人形をもちいた影絵芝居である。スバエク・トムの「人形」は、物語の１場面が背景とともに掘り込まれたパネル様のものが多く、しばしば複数のキャラクターがその中に描かれている。ヤシ殻に灯した炎により大きな幕に影を映し出す。人形の遣い手たちは、幕の表にも現れ演技をする。音楽に合わせた遣い手たちの身体の動きも重要な要素であり、影絵舞踊劇と言ってもよい。リアムケー（クメール版ラーマーヤナ）を題材としており、妻シータを魔王ラーヴァナに奪われたラーマ王子が、猿の軍の助けを借りて魔王の住むランカー島に攻め入るところから、ラーヴァナの息子インドラジットがラーマの弟ラクシュマナとの戦いで命を落とすまでを、かつては７晩かけて演じたという。物語を進行させる語りは重要な役であり、語り手は一座をまとめる要の位置を占めている。スバエク・トムは、かつて種々の祭事に加え、高僧の葬儀や疫病の流行などの際にも上演されたという。これは、スバエク・トムが単なる娯楽ではなく、儀礼的あるいはおそらくある種の呪術的要素をももった芸能だったことを示している。2000年にカンボジア伝統芸能研究会が国際交流基金の助成を受けて全７夜のレパートリーを映像で記録し、現在、民博にその映像が所蔵されている。

スバエク・トムの伴奏をするピン・ピアット合奏



大型影絵芝居スバエク・トム

ソンペア・クルー儀礼

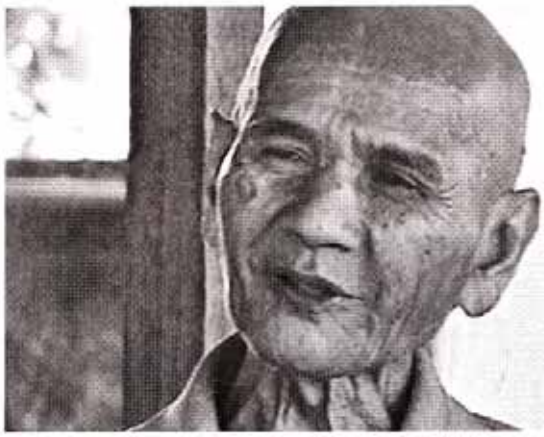
クルー（師）

スバエク・トムの上演に伴う儀礼や上演の一切をとりしきるリーダーは、クルー（師）と呼ばれる。スバエク・トムを伝承してきた先人たち、芸能を支える精霊たち、そして神々もまたクルーと呼ばれ、上演の前には、必ずソンペア・クルーと呼ばれる儀礼を行い、それらの先人、精霊、神々に祈りをささげる。

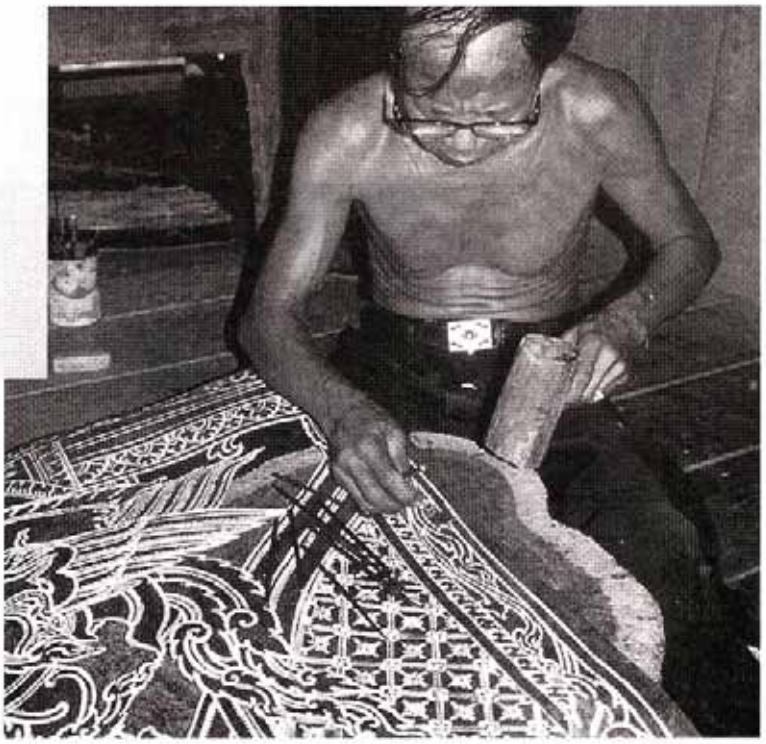
ティー・チアン師（1917-2000）は、25歳のころにクルーの地位を引き継ぎ、スバエク・トムの一座を切り盛りしてきた。彼の語りは美しく、並ぶ者がないと言われた。2000年には、すぐれない体調をおして、自ら7夜連続の上演を記録することを提案し、撮影に応じてくれた。

スバエク・トムの復興に向けて

スバエク・トムは、ポル・ポト時代の芸術家の虐殺、その前後の内戦の影響により、深刻な伝承の危機に直面している。生身の人間が担う「無形文化」、特に芸能は、生き残っている少数の長老たちが世を去れば、永久に失われてしまう可能性もある。したがって、高齢の芸術家から若い世代への芸の伝承は緊急の課題であり、そのための環境づくりが急がれる。首都プノンペンの芸術大学においてもこうした芸の伝承への努力はなされているが、もともとの伝承地シエムリアップにおける伝承も確実なものとしなければならない。今後、安定的な上演の機会を作りだすこと、スバエク・トムを見たこともない世代への啓蒙的活動などへの手伝いなども必要だろう。なお、スバエク・トムは、2005年11月、ユネスコにより「人類の口承及び無形遺産の傑作宣言」のリストに加えられた。



ティー・チアンさん（民博製作映像作品『カンボジアの影絵芝居の師』より）



人形を彫る

完成した人形

伝統芸能最前線　南インドの結婚式と音楽

寺田　吉孝

1.急激に変化するインド社会

1991年の経済自由化以降、インドは急激に変化しています。その変化はIT産業の目覚しい躍進など主に経済面において顕著ですが、人々の生活のあらゆる側面に現れ始めています。ファーストフード店の増加やレトルト食材の普及によって「家庭の味」が失われつつあること、伝統的なサリーを着る若い女性が減少していること、携帯電話やインターネットが広い階層に普及しつつあることなどはその例です。音楽も例外ではありません。悠久普遍のイメージをもつインド古典音楽は、海外居住インド人（NRI）の参入などによってグローバル化が進み、その内容は大きく変化しようとしています。また、古典音楽を素材に使いながら、新しいインドにふさわしい音楽が模索されています。

このような急激な社会変化は、結婚式とその場で演奏される音楽にも如実に現れています。2006年１～２月に南インドで撮影した映像を見ながら、インド社会の変化の様態を見てみましょう。

2.タミル人の結婚式（タミル・ナードゥ州）

南インドのヒンドゥー教徒の結婚式では楽師たちが大音響で演奏する音楽が欠かせないと考えられてきました。ナーガスヴァラムという管楽器を中心に太鼓とシンバルからなるアンサンブルは、儀礼の進行に即した音楽を演奏します。ナーガスワラムの音は「めでたさ」を増進するために結婚の船出には不可欠であると説明されてきました。しかし、ＣＤ技術の浸透は楽師たちの生活基盤を揺さぶっています。以前は生演

結婚式での楽隊の演奏

結婚式でのナーガスワラム音楽の演奏

奏がつきものだった儀礼のうち、婚約や安産祈願儀礼などでは楽師を雇うかわりにCDで代用することがすでに普通になっているのです。この楽器がもっていた「吉祥」のオーラは確実に薄らいでいるようにみえます。

結婚式で演奏される音楽にも変化が現れています。楽師は結婚式を構成する様々な儀礼に対応する音楽を演奏します。このような音楽は主に古典音楽もしくはそれに準ずる音楽です。その中でも特にめでたいとされる旋法（ラーガ）の即興演奏または楽曲を演奏します。音楽に対する嗜好はカーストによって異なり、ブラーマンの人たちが概ね古典音楽を好むのに対し、それ以外のカーストでは映画のヒット曲をリクエストする主催者、会衆が増えています。そのため、市販のカセットテープ・CDを聴いて映画音楽ヒット曲を覚えるようにつとめる楽師が増えています。

結婚式は、村では花嫁の実家で行われてきましたが、都市部では専用ホール（カリヤーナ・マンダパム）で開かれることがほとんどです。人気のあるホールは早くから予約が入るため、結婚の日取りが決まるとホールを第一に確保しなければなりません。最近は、結婚式を請け負うウェブサイトができ、結婚式場の予約は簡単に出来るようになりました。このようなサイトでは、これまで主催者が個別に行わねばならなかった楽師への演奏依頼も、結婚式場の予約や調理チームの雇用と一緒にパッケージ化され利用者に提供されています。主催者が希望する楽師を自ら招聘するのではなく、請負業者に楽師の選定を任せることが増えています。

ホテルの結婚式会場

楽隊の寺院での演奏

3.カルナータカ州の結婚式

南インド西部のカルナータカ州では、結婚式で演奏される伝統的な楽器ナーガスワラムのかわりにサクソフォーンが演奏されることが多くなっています。インドにおける西洋楽器の移入は宮廷において始まった場合が多く。カルナータカ州におけるサクソフォーンの流行はその好例といえます。この地域を支配していたマイソール王朝の王、クリシュナデーヴァは西洋音楽に強い興味をもち、自らヨーロッパから音楽教師を招いて音楽を学んだだけではなく、宮廷の楽師たちに西洋楽器を用いてインド古典曲を演じたり、その逆にインドの楽器で西洋の楽曲を演奏したりするように命じました。宮廷所属のナーガスワラム奏者は、この王の命令でサクソフォーンを学び、その奏法を弟子たちに伝授したといわれています。サクソフォーンは、はじめ結婚式の伴奏として用いられましたが、その音は新婚夫婦に福をよぶと考えられているのでしょうか。近年では、ナーガスワラムの演奏が義務づけられていた寺院儀礼においてさえサクソフォーンが演奏される場合が増えています。

結婚式

僧侶、花嫁、花婿